

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

報告書

高校模擬国連国際大会への第 11 回日本代表団派遣支援事業



2017年6月



グローバル・クラスルーム日本委員会

Japan Committee for Global Classrooms



ACCU 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

【共催】

国際連合大学

【後援】

外務省

文部科学省

国際連合広報センター

公益財団法人日本国際連合協会

【協賛】

株式会社内田洋行

UCHIDA 内田洋行

学校法人河合塾

河合塾

株式会社公文教育研究会

KUMON

株式会社講談社

講談社

学校法人駿河台学園

駿台予備学校

一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN

株式会社エヌエフ回路設計ブロック

NF

キックマン株式会社

kikkoman

TOEFL Junior® (GC&T)

ETS TOEFL Junior

株式会社ジェイティービー

JTB

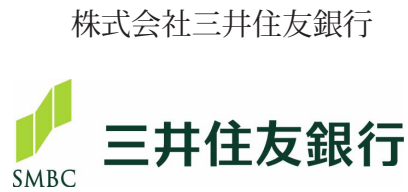
感動のそばに、いつも。

学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール

YGC
Y-SAPIX GLOBAL CAMPUS
代々木ゼミナール

トヨタ自動車株式会社

TOYOTA



(五十音順)

【協力】



(五十音順)



全日本高校模擬国連大会は、留学促進キャンペーン
「トビタテ! 留学 JAPAN」の趣旨に賛同します

目次

はじめに	2
グローバル・クラスルーム	3
企画概要	4
派遣報告	5
受賞	10
参加者報告（アドバイザー・派遣生）	11
支援者・支援団体一覧	39
ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）からのメッセージ	40
グローバル・クラスルーム日本委員会（2017年6月現在）	41
おわりに	42
関連リンク	43



■ はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への 11 回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業では、関係省庁・団体、企業・法人等、多くの皆様のご支援・ご協力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本事業では、2016 年 11 月に国連大学で行われた第 10 回全国高校模擬国連大会にて優秀な成績を収めた 6 校 11 名の高校生が、日本代表団として、2017 年 5 月にニューヨークで開催された国際大会に参加しました。今年度は、日本代表団はカーボヴェルデ共和国の大使として、「世界」を舞台に、持てる力の全てを出し切って会議に臨みました。

派遣生は皆、「世界」に向き合うことで、社会と向き合い、他者と向き合い、そして自分自身と向き合ったことでしょう。2 日間、自身の全てを出し切って「世界」に挑んだことで、これまでにはない新たな発見をしたことと思います。派遣生それぞれが、国際大会を通じて得たものを糧に、新たな未来への一歩を踏み出すことを心より願っております。

最後に、グローバル・クラスルーム日本委員会は昨年度に 10 周年を迎え、新たな一歩としての 11 年目に踏み出しました。高校模擬国連活動の更なる普及と発展に向け、本委員会も成長を続けて参ります。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2017 年度 理事長 高橋佑太



■ グローバル・クラスルーム

グローバル・クラスルームは、模擬国連という国連会議のシミュレーションを通じて、現代世界における様々な課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する生徒は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国国連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。

グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。日本でも、大学生の模擬国連は30年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして2007年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第1回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。



企画概要

【企画名称】

2017 年度高校模擬国連国際大会への日本代表
団派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会、
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
(ACCU)

【日程】

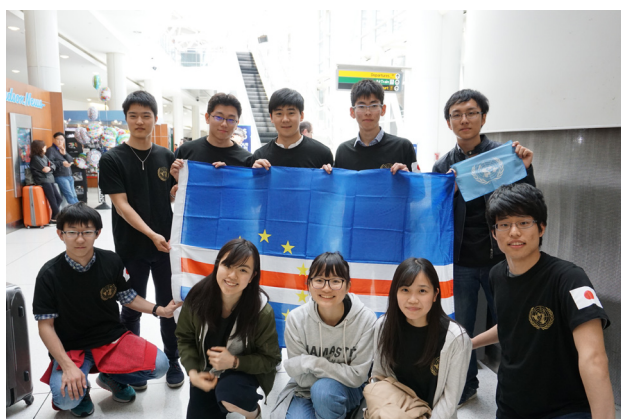
2017 年 5 月 9 日 (火) ～ 15 日 (月)

【開催場所】

米国ニューヨーク市

【内容】

米国国連協会の主催により開催される高校
模擬国連国際大会 (the 18th Annual Global
Classrooms International High School Model
UN Conference) に、グローバル・クラスルー
ム日本委員会主催の第 10 回全日本高校模擬
国連大会 (Global Classrooms in Japan 2016)
にて選出された高校生が日本代表団として参
加することへの支援。同大会には米国国内の
30 都市を含む世界 20 か国から総勢約 1600
名の高校生が参加した。



1) 日本代表団 (11 名)

浅野高等学校

小塚 慶太郎 宗武 陸

開成高等学校

田久保 将人

渋谷教育学園渋谷高等学校

小牧 薫子 鶴巻 明梨

渋谷教育学園幕張高等学校

小寺 圭吾 高橋 千佳

桐蔭学園中等教育学校

青木 溪 高橋 遼

灘高等学校

北口 智章 柳津 聡

2) 引率教員 (6 名)

宮坂 武志 (浅野高等学校)

山崎 欣也 (開成高等学校)

室崎 撰 (渋谷教育学園渋谷高等学校)

齊藤 智明 (渋谷教育学園幕張高等学校)

橋本 雄介 (桐蔭学園中等教育学校)

宮田 幸一良 (灘高等学校)

3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (5 名)

評議員・派遣団団長 米山 宏

(公文国際学園中高等部教諭)

理事 岡野 源 (東京大学 2 年)

研究主任 南 篤 (東京大学 3 年)

研究 石本 達也 (東京大学 2 年)

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

模擬国連推進部 青木 文

派遣報告

【派遣日程】

- 4月16日（日）インフォメーション・セッション
 5月9日（火）日本出発
 NY到着
 国連カーボヴェルデ政府代表部訪問
 5月10日（水）ILO訪問
 5月11日（木）UN Women 事務局訪問
 国際連合事務次長 中満泉氏訪問
 国連日本政府代表部訪問
 5月12日（金）国際大会開会式・1日目
 5月13日（土）国際大会2日目
 国際大会閉会式
 5月14日（日）NY出発
 5月15日（月）日本帰国



【参加会議】

学校名	参加者氏名	担当会議	議題
浅野高等学校	小塚 慶太郎 宗武 陸	World Bank (WB)	Balancing Financial Stability & Development in Low-Income Countries
開成高等学校	田久保 将人	International Labour Organization (ILO)	Green Economy & Sustainable Growth
渋谷教育学園渋谷高等学校	小牧 薫子 鶴巻 明梨	Social, Humanitarian and Cultural Committee (GA3 SOCHUM)	Death Penalty, National Sovereignty & Right to Life
渋谷教育学園幕張高等学校	小寺 圭吾 高橋 千佳	International Maritime Organization (IMO)	Maritime Pollution
桐蔭学園中等教育学校	青木 溪 高橋 遼	World Health Organization (WHO)	Ensuring Health Coverage for All
灘高等学校	北口 智章 柳津 聡	Disarmament & International Security Committee (GA1 DISEC)	Chemical Weapons

April 16

【インフォメーション・セッション】

日本出版会館の会議室にて、渡米前の説明会及び政策発表会を行いました。JCGC 評議員から激励の言葉を受け、派遣生たちは国際大会が目前まで迫っていることを改めて認識し、決意を新たにしました。

政策発表会では、担当国であるカーボヴェルデ共和国の大使として、担当会議ごとに設定された議題について自分たちの政策を英語で発表しました。今回は、海洋政策研究所より小林正典氏、ILO 中日事務所より奥村尚子氏を招き、派遣生たちはフィードバックを受けました。また評議員、他の派遣生との質疑応答を通じて担当会議・議題についての理解を深めました。また、午後に行われたグループディスカッションでは、派遣生たちは英語を駆使して話し合い、親睦を深めると同時に、自分たちのスキルアップにも努めました。

今年度も過去の国際大会派遣生が多く集まり、派遣生たちは様々なアドバイスを受けました。



May 9

【日本出発・NY 到着】

成田国際空港からジョン・F・ケネディ空港へと出発しました。今年の派遣生達は、派遣団オリジナルのTシャツを持参するなど、皆和気藹々とした様子でした。

【国連カーボヴェルデ政府代表部訪問】

カーボヴェルデ大使から国の国際的な位置付け・外交方針・現在抱えている問題の3点について話を聞きました。カーボヴェルデはアフリカ大陸から西約500kmに位置する15の島からなる国です。リゾート地として観光業が栄えている一方、資源が少なく、大陸からの援助を常に必要とするため、アメリカ・EU・アフリカ諸国などあらゆる国と常に良い関係づくりが重要です。その中で国連の掲げている開発目標SDGsの達成に向け、包括的な開発によって貧困削減を目指しているとのことでした。質疑応答では、すでに国民のほとんどがクレジットカードを持っている、などインターネットでは分からない情報を聞くことができました。派遣生1人1人が、カーボヴェルデにとっての国益は何なのか？という疑問を常に持ちつつ、会議に向けて「生の声」を聞くことができ、貴重な体験となりました。

(小塚・小寺)



May 10

【ILO ニューヨーク事務所訪問】

5/10にILO ニューヨーク事務所を訪問しました。Kevin Cassidy シニアオフィサーは、とても優しくユーモア溢れる方で、貴重なお話を聞いただけではなく、国際人としてのあるべき姿を垣間見ました。Cassidy氏は、「多くの人が人生の中で家族という時間より仕事をしている時間の方が長いことから、その環境を守るのが私たちの役目だと思っているし、君たちには是非、自身が望むやりがいのある仕事について欲しいと思う。僕の場合はILOの職場がまさにそれだった。」と語っていました。

また、今ILOのメインピックの一つであるディーセントワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を構成する4つの柱やILO特有の機能である社会対話、そして今回議題であったグリーン経済におけるILOの役割についても詳しく解説を聞くことができました。世界大会でILOの議場を担当した者として、今回の話を聞くことができ、大変有意義な時間となりました。

(田久保)



May 11

【UN Women 本部訪問】

はじめに担当者から、UN Women 事務局が男女平等社会に向けて政治や経済、保健など様々な分野で尽力していることを聞きました。その後、災害時の人道的支援でいかに女性の被害者を減らすか、企業とどのように協力して女性の社会進出を支えるか、の2点についてさらに説明を聞きました。最後に派遣生は、伝統や宗教に起因する女性差別の解決策や、男性が男女平等社会実現のために出来る具体的な行動などについて質問をしました。

今回の訪問では、事務局内の男性職員から話を聞く機会もありました。男女平等社会の実現は男性との対立を招くものではなく、むしろ男性にとっても有益であるという意見は、男子生徒の多い11期派遣生にとって印象的でした。また、単に女性が権利獲得を主張するだけでなく、社会全体が経済的・組織的なアプローチを試みる必要性を感じました。

この訪問をきっかけに、派遣生同士も女性の権利向上に関する意見交換を行いました。同世代にも関わらず、育つ環境によって考えが異なり、有意義な議論になりました。

(小牧・高橋千佳・柳津)



【国際連合本部訪問】

今年の5月に、それまで国連事務次長補であった中満泉氏が就任した軍縮担当上級代表とは、国連の軍縮部門における最高位のポストです。化学兵器の使用や北朝鮮の核実験など、大量破壊兵器に関する問題が注目を集める中、国連はどのような役割を果たすべきかについての分かりやすい解説がありました。目下進行中の具体的な議論の紹介にとどまらず、大局的な視点から「人類共通の価値観を構築し、その先の理想を高く見据える」ことの重要性が強調されていたのは印象的でした。

中満氏の国連職員としての豊富な経験を聞く中で、各地の現場で働くこと、また次長時代では総合職としてNYで働くこと、それぞれの魅力に気づかされました。様々な問題が山積している現場には、若手が率先してアイデアを出しリーダーシップを発揮できる環境があり、そのような経験は大きな財産となります。また現在の中満氏のように、一つの分野を複眼的に検討し、多様な側面から対処する総合職も、国際問題を解決する上で欠かせない存在だと思いました。

(北口・鶴巻)



【国連日本政府代表部訪問】

日本政府代表部の間瀬氏、山田氏より、主に派遣生との質疑応答を通じて、国際社会における日本の役割、政府の国際問題に対するの姿勢、実際の国連外交の内容などについての講義がありました。実際の国連会議に携わっている二人からの話は、普段それを模擬している我々派遣生にとって、どれも興味深いものでした。個人的には、「国連の議論の9割は議場の外で行われている」ということや、「二国間での交渉と多国間の交渉のバランスをとりながら、うまく国益を達成していく」という二つは特に興味深いものでした。普段、我々が模擬国連活動を行う際、必ずどこかの国を模擬し、会議準備としてその国の議題への姿勢などを調べます。しかし、基本的にその情報源はインターネットや書籍などにとどまり、実際の国連担当者から話を聞くことができないのが現実です。そのため、日本代表部の職員と話すことができたのは、国際大会での自身の行動に役立っただけではなく、自身の知見の拡大、ひいては人生の糧となったと確信しています。

(青木・高橋遼)



May 12-13

【高校模擬国連国際大会 会議 1 日目】

模擬国連会議が グランドハイアットホテルにて行われました。派遣生によって参加する会議や扱う議題も様々でしたが、どのチームも真剣に他国の大使と交渉し、自国の国益達成を目指しました。



【高校模擬国連国際大会 会議 2 日目】

初日の会議行動で手ごたえを感じた派遣生も直前まで会議戦略を練り直した上で、2日目の会議に臨みました。どの派遣生も自分が設定した目標に向かって最後まで諦めずに交渉を続けました。



【高校模擬国連国際大会 閉会式】

会議終了後、閉会式が国連本部総会本会議場にて行われました。今回の派遣団からは、渋谷教育学園渋谷高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校、灘高等学校が優秀賞 (Honorable Mention Award) を受賞しました。二日間の会議を終えた派遣生達は皆達成感に満ち溢れた表情をしていました。



【NY 出発・日本帰国】

ニューヨークでの5日間はあっという間に過ぎ去り、15日にジョン・F・ケネディ国際空港を出発し、16日に帰国しました。異国の地での会議を乗り切った派遣生達は渡米前に比べて何倍もたくましくなったように思います。



受賞

2017年度の日本代表団からは、3校が優秀賞を受賞しました。

- 渋谷教育学園渋谷高等学校・・・国際連合総会第三委員会
議題 “Death Penalty, National Sovereignty & Right to Life”
- 渋谷教育学園幕張高等学校・・・国際海事機関
議題 “Maritime Pollution”
- 灘高等学校・・・国際連合総会第一委員会
議題 “Chemical Weapons”

— 優秀賞 (Honorable Mention Award) —

渋谷教育学園渋谷高等学校



渋谷教育学園幕張高等学校



灘高等学校



岡野 源

東京大学教養学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 理事

参加者報告 (アドバイザー)

初めに、今回の派遣事業にご協賛・ご協力並びにご後援いただいた全ての団体の皆様並びにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わって頂いた、全ての皆様に御礼申し上げます。

今年の派遣事業は日程に恵まれ、カーボヴェルデ共和国政府代表部、ILO ニューヨーク事務所、UN Women 事務局、国連事務次長軍事担当上級代表の中満泉氏、日本政府代表部の5つの場所への表敬訪問を実施しました。実際に国際社会の最前線で働いている方々の話を聞くことができ、派遣生にとっても良い経験だったと思います。

今回の表敬訪問は、実際に模擬国連で得た知識などについて質問をする場であっただけではなく、生徒たちの興味を著しく喚起し、今後の人生に大きくプラスになるものだったと思います。カーボヴェルデ共和国政府代表部では派遣生が用意してきた政策について大使と議論を行い、日本政府代表部及び中満氏の事務所では、生徒たちが日頃疑問に思っている国際問題について実情を交えて教わり、ILO ニューヨーク事務所及び UN Women 事務局では、実際に国際機関で働く、ということの魅力を知ることができました。

2年前、派遣生としてニューヨークに飛んだ時の私はあまり意識することがありませんでしたが、今回の派遣では、この事業においてこれらの表敬訪問が高校生である派遣生にとってかけがえのない経験をあたえてくれる、素晴らしいものであると思いました。もちろん主眼は高校模擬国連国際大会に出場し、優秀な成績を収めるべく会議に臨むことでしょう。実際に今回の派遣生は、言語の壁を全く感じさせない、卓

越した言語能力を持って世界の高校生たちと切磋琢磨し、練りに練った政策をもって会議をまとめ、リーダーシップを遺憾なく発揮していました。そのうち3校はその活躍を認められ、優秀賞を受賞しました。これらは誇るべき素晴らしい結果でしょう。しかしそれ以前に、同年代の高校生と国際問題について議論することと同様に、実際に国際政治の最前線で活躍している方々と議論し、国際社会の現状を再認識することは、将来を見据え勉学に励んでいる高校生たちにとって、十分に価値のあるものです。表敬訪問の後、実際に聞いた話について自然と議論していた派遣生同士を見て、私はそのように感じました。

また、これらの表敬訪問は生徒たちの国際大会での活躍にも影響していたように思います。合計3回の英語での表敬訪問を終えた派遣生は、自信に満ち溢れていました。この3回の表敬訪問中、彼らは外国の方々と英語で議論を行い、様々な問題について意見を述べていました。それは実際に大会で高校生を相手に交渉する上で自信になっていたように感じました。

このように、派遣生たちは高校模擬国連国際大会で、世界各国より来た同世代の高校生と議論を交わしただけでなく、日本の代表として、国際社会の最前線で活躍する方々と交流するという経験をしました。それは高校生が過ごす1週間としてはとても充実したものだったように思います。私にとって今回の派遣は、世界で起きている諸々の国際問題を解決しようと志している高校生たちに、このような機会をあたえてくれるこの派遣事業の魅力を再認識させてくれるものでありました。そのような派遣事業、また模擬国連活動そのものを盛り上げていくべく、理事としてより一層努力していく所存でございます。

繰り返しになりますが、今回の派遣事業をご

支援くださいました方々に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼を申し上げ、この報告の締めくくりとさせていただきます。

南 篤

東京大学農学部 3 年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究主任

はじめに、平素より本委員会の活動にご賛同・ご支援・ご協力いただいているすべての皆様に深く御礼申し上げます。派遣生の会議準備や会議行動をサポートし、常に一番近くから派遣生を見ることのできた研究主任という立場から、今回の派遣事業を振り返りたいと思います。

カーボヴェルデという担当国を与えられて以来、派遣生はおよそ半年にわたり会議の準備を進めてきました。派遣生にとっては名前も知らない、どこにあるかも知らない国で戸惑いながらも、国について、またそれぞれの議題について徹底的にリサーチを行い、政策を考え抜いていました。中には議題に精通する方のお話を聞き、それを政策立案に生かそうとする派遣生もいるなど、派遣生が受動的にではなく、能動的に情報を集める姿勢を感じる事が多くありました。こうした会議準備により、派遣生たちが例年通り議場で最も豊富な知識を持っていたことは間違いありません。

会議本番では、日本とは異なる模擬国連会議の進め方や言語の壁など、さまざまな困難に直面しました。しかしどの派遣生も諦めることなく議論し続け、中にはグループのリーダーとなったり、成果文書の提出国となったりと、議場の中心で活躍する派遣生の姿も多く見られました。きっと、世界各国から参加している高校生の中で「カーボヴェルデ」の知名度は上がったことでしょう。

派遣生の多くはアワードを目標としていましたが、私は彼らのサポートにあたって、もう一度自分たちと向き合い、自分たちにとっての模擬国連を見つめなおし、なぜアワードを目指すのかをしっかりと考えたうえで、その目標に向かって邁進することを何度も伝えてきました。その甲斐あったか、なかなかうまくいかないときも諦めず「こ

れから何ができるか」を探る姿勢を持ち続け、私自身心を動かされることが何度もありました。

国際大会という経験は、世界各地から集まった同世代の優秀な学生と真剣に議論できる機会を与えてくれます。模擬国連会議の進み方などは日本と異なりますが、優れた交渉術や人を引き付けるリーダーシップなど、他の参加者から派遣生は様々なことを学んでいた印象を受けました。今大会で世界水準の能力を目の当たりにすることができたことは、派遣生にとって大きな財産となったと思います。

これまで模擬国連に長い間全力で取り組んできた派遣生にとって、今大会は集大成であり、ひとつの区切りとなります。しかし、すべての派遣生にとって、今大会が完全にうまくいったわけではなく、必ず不本意に感じていることや、悔しい思いを残しています。彼らひとりひとりが感じたことは、後頁に掲載している派遣生の報告から、この報告書の読者の皆さんも感じていただけたと思います。完全に満足できる「終わり」を迎えるということは、中々できることではありません。もちろんうまくいった部分も自覚し、自信に繋げるべきですが、私は悔しさも今後の糧に十分なり得ると考えています。それは、この国際大会が派遣生にとっての模擬国連の「終わり」であると同時に、新たなステージの「始まり」であり、その悔しさこそが、彼らの新たなステージで活躍できる原動力になると確信しているからです。派遣生が将来どのような活躍をしているのか、そこに本事業の真の価値があるのです。彼らの 10 年後、20 年後が楽しみでなりません。

最後に繰り返しになりますが、今回の派遣事業を支えて下さった方々に、グローバル・クラスルーム日本委員会の一員として厚く御礼を申し上げます。私からの報告を終わらせていただきます。

石本 達也

東京大学教養学部 2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究

今回私は、グローバルクラスルーム日本委員会研究として会議サポートを主眼において、本派遣事業に携わりました。

派遣生はカーボヴェルデ大使として、半年近く国際大会に向けて準備してきました。聞いたこともないような担当国で、関連資料が少なく派遣生は苦戦したと思いますが、それでも緻密にリサーチを行い、政策を作って臨みました。

国際大会本番では、日本の模擬国連とは異なる会議の進行方法や言語の違いなどに戸惑いながらも、外国人の参加者に物怖じすることなく果敢に議論し続け、議場の中心として活躍する姿が見受けられました。中には会議中、想定外の議場展開に困惑した派遣生もいましたが、それでもあきらめずに、今自分に何ができるのかを模索し頑張っている姿を見て、心を動かされました。

模擬国連には知識などを得られるだけでなく、同世代の参加者同士が互いの会議での行動や、議題に対する考え方などから様々なことを学び、また会議に向けての準備や会議を通して、自分のなかで何か気づきを得て成長につなげることができるという側面があると、私は考えています。

今回国際大会のサポートをすることを通して、私自身、国際会議に真剣に取り組んできた派遣生たちから学ぶことが多く、私自身にとってもかけがえのない経験でした。そして今回の派遣事業で派遣生たちが成長する場に立ち会えたことをとても嬉しく思います。派遣生にとって国際大会は、世界中から集まった優秀な高校生たちと議論を交わし、海外の模擬国連というもの

を体感できる貴重な経験であったと思います。派遣生はこの国際大会の参加者と接することで得られたこと、また国際大会に向けた準備や本番を通じて、自分のなかで気づいたことを生かし、今後さらに活躍してほしいと思います。

また、私は来年度の派遣事業にも同行する予定となっています。国際大会出場を目指す高校生のみなさんには、ぜひこのチャンスを掴んでもらいたいと思います。その過程は容易なものではないですが、得られるものはたくさんあります。準備から会議本番までで自分、そしてパートナーと向き合い、自分には何ができるのかを見出すことが出来ます。世界各国から集まる様々な高校生と交流することもできます。また国際大会に出場することを目標にして努力するなかで、成長する機会もあります。模擬国連活動をする上で、十分目標に値すると思うので、ぜひ目指してみしてほしいと思います。私も、これまでの派遣事業の経験を踏襲し、来年度のサポートを行えるよう努力していく所存でございます。

最後に今回の派遣事業にご支援ご協力くださった関係各所のみなさまに深く感謝を申し上げますとともに、今後ともこの派遣事業を継続的に行えますよう、引き続きみなさまのご協力をお願い申し上げます。

参加者報告（派遣生）

小塚 慶太郎

浅野高等学校 3年

“Try my power”

これは今回の派遣を通して立てた個人的なスローガンで、文字通り「自分の力を世界の舞台で試す」という意味です。全日本大会から死ぬ気で準備をしたら、世界の舞台でどれほど通用するのだろうか、という素朴な疑問から生まれました。この報告書では、今回の派遣を通して得られた3つの力について書きたいと思います。

1. 世界で通用する力

① ニューヨーク

ニューヨークには殺伐とした雰囲気があります。歩くたびに人とぶつかりそうになり、街中で“Excuse me”が飛び交っています。外国人の話す声は大きく、地下鉄やカフェでも自分は大きな声を出す必要がありました。なぜそんなにも殺伐としているのか？それはニューヨークが世界の中心であり、新たなものが生まれる場所だから、と思います。ニューヨークにはたくさんの優秀な人・高価なモノがあり、世界の競争社会の中心です。様々なものが生まれ競い、良いものは生き残り、悪いものは淘汰されていく。そういった熾烈な競争が行われているため、ニューヨークには独特な殺伐とした雰囲気があるのではないかと感じました。

② 会議

今回、アフリカの島国カーボヴェルデを担当し、世界銀行の議場に2日間参加しました。初日は“mobile banking”という携帯電話を利用した新たな銀行システムを提案し、それを軸としたグループを形成しました。2日目は Draft Resolution（成果文書案：DR）の提出国となり、コンバイン（他のグループとの意見統合）交渉やDR説明を行いました。工夫した点は、“mobile banking”を会議全体に普及するために目立つ黄

色のチラシを作ったこと、ホワイトボードを活用し他の国の意見を目に見える形にしてまとめることの2点です。思惑通りどちらも成功し、密度の濃い(内容をしっかりと理解し、連携の取れた)グループを作ることができました。全日本大会の勝因を分析する中で、模擬国連において必要な力は、「本質を見極める力」・「行動力」・「問題解決力」・「リーダーシップ」・「対人スキル」の5つだと考えました。これらの力を最大限自分の中で高めて国際大会に臨み、自分の理想通りの会議行動をとることができました。

このように、ニューヨークという様々な力を持った人が集まる殺伐とした雰囲気の中で、自分の力を発揮することができました。このことは”Try my power”をスローガンに掲げていた自分にとって大きな自信となりました。

2. 仲間を大切にすること

「1人の力なんて、たかが知れている」これは全日本大会の頃から感じていたことです。全国や世界には自分より凄い人がたくさんいる、それは言うまでもありません。前の段落では、あたかも自分1人で全てをやったかのように書きましたが、そんな訳はありません。大事な仲間がいたからこそ、自分の何万倍もの力を発揮することができました。

①ペア

ペアの宗武君との協力。これは自分の中で派遣前の最大の課題・不安でした。1つ後輩のペアをどうやってリードしていけばいいのか、どうやってモチベーションを上げればいいのか。始めのうちは、この派遣に対する温度差の違いに苦労しました。お互いにストレスが溜まり、喧嘩することもありました。しかし喧嘩をし、お互いに本音で言い合うことによって少しずつ溝が埋まりました。4月頃「最優秀賞を獲得する」という共通の目標を持ってから、歯車が噛み合い準備がスムーズに進みました。会議での成功は彼なしには不可能だったと感じます。

②グループのメンバー

ここでいうグループとは、会議で形成されるグループのことを指します。模擬国連では、議題に関して似たスタンスを取る国でグループを作ります。この際、グループをまとめるリーダーとして、行動することが賞を獲得する上で重要です。今回開発途上国、特にアフリカ諸国を集めてグループを作りました。会議当初、似たような途上国グループは6つほどありました。その後、議長からの要望により最終的には2つになりました。この際、4つのグループが他のグループに吸収されました。しかし私のグループは最後まで生き残ることができました。なぜ生き残ることができたのか？それは貧困削減という明確な会議での目標を全員が持ち、mobile bankingという他のグループにはないユニークな案を持っていたからだだと思います。全員が同じ目標を持つこと、それこそが強いグループを作るために必要なことだと思います。そのためにはグループのリーダーが目標を設定・普及し、雰囲気の良いグループにしてメンバーの心を掴むなど仲間を大切にすることが重要だと思いました。

③派遣団のメンバー

1番心強い仲間は誰か？これは間違いなく派遣団のメンバーです。同じ全日本大会を勝ち抜いたメンバー、同じ喜び・辛さを経験しているメンバー、これほど心強くて頼りになるメンバーはいませんでした。政策・会議戦略を見せ合っただけでアドバイスし合うことで気づかなかったポイントに気づかされたりしました。このように会議においてはもちろん、将来についてなど様々なことで刺激し合い、切磋琢磨できる関係、これが派遣団の強みだと確信しています。

3. 自分を信じる力

様々な仲間を支えられて派遣を終えることができました。今振り返った時、なにか物事を始め行動する際、最後に重要になってくるのが「自分を信じる力」だと思います。ここまで準備を

したので心配ない、みんなが支えてくれているから怖くない。初めての海外、国際会議という大舞台上、揺るぎないものは「ここにいる自分」のみだと思います。だからこそ2mくらいある外国人とも堂々と交渉できたし、まくし立ててくる外国人をまとめることができましたと思います。これからも何かに挑戦する際、自分を信じることを忘れないようにしたいと思います。

「最優秀賞 ガーナ」国連総会の議場で聞いたこのフレーズを未だに忘れることができません。この瞬間、受賞できないことが決まりました。なぜ受賞できなかったのか？それはわかりません。ただ悔しい、それに尽きます。自分は会議で理想としていた行動をとることができた、グループのリーダーとして最後のDR提出まで持ち込むことができた。これらのことは上記の3つの力を全て自分が獲得したからこそ成し遂げられたことだと思います。この悔しさはこれから先ずっと忘れられないでしょう。

今までこの派遣は自分の中でゴールでした。この派遣に向け半年弱、全力で取り組んできました。しかし受賞できなかった時、「またここに来たい」そう感じた瞬間から、この派遣はゴールではなく新たなスタートです。今度は、国連総会の議場に閉会式ではなく、模擬でもなく、大使や本当の意味での日本代表として行きたいと思います。それに向け、精神的にも肉体的にも人間的にも、そしてもちろん頭脳もパワーアップしていきたいと思います。そしてどんな時も、この言葉を忘れずにいきたいと思います。

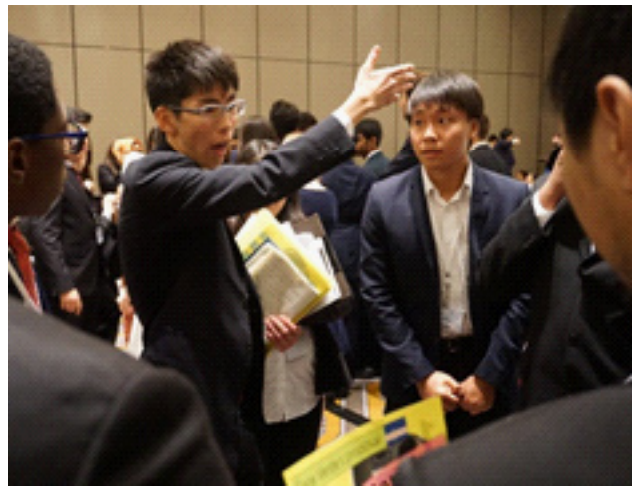
“Try my power”

最後になりましたが、今回の派遣で様々な方にお世話になりました。

外務省に勤められていた浅野OB会長の中村さん、顧問の宮坂先生、ディベート部の先輩・後輩、浅野生、ACCUの青木さん、グローバルクラスルームの南さん、岡野さん、石本さん。派遣団のみんな、そしてペアの宗武君。その他応援してく

ださった全ての皆様

本当にありがとうございました！！



宗武 陸

浅野高等学校 2年

-Those who live are those who fight-

Victor Hugo

閉会式。終わりの木槌が鳴らされたとき、僕はずっと終わらないと思っていた長い戦いがついに終わってしまったことに気づくと同時に、これまでの模擬国連生活を思い返していました。

「模擬国連」、その言葉を初めて聞いたのは中学三年生の一月でした。何かに役立つだろうとなんとなく参加した初めての大会では他の中学生や高校生が自らの国際社会の問題について政策や意見を堂々と主張し、英語で Draft Resolution (成果文書案：DR) を書いていたことにただただ圧倒されました。同世代にはこんなすごい人たちがいるのか、当時の僕は大きなカルチャーショックを受けました。自分が井の中の蛙だったことを知りました。そのときに強く感じた「悔しい」という感情が国際大会までの原動力だったのかもかもしれません。

相方と出会ったのは、高一の6月でした。「俺と全日出たいやつ〜、NY連れてくぞ〜」

そもそも全日が一体どのようなものなのかさえ解っていませんでしたが、チャンスは絶対に逃さない、が信条の僕はとりあえず組んでみることにしたのです。「宗武・小塚ペア」の始まりでした。

その後、一次選考をなんとか突破し、全日本大会に出場しました。結果的に優秀賞を獲得することはできましたが、会議が終わった夜、自分に日本代表が務まるのか、受賞したのは先輩のおかげだったのではないかと、もっと自分の他にすごい大使がいるのでは、と僕は深く悩みました。しかし、その後僕は気づきました。それは「傲慢」だ、と。誰かが選んでくれたのだから賞をもらったのであって、偶然ではないのだと。自分に自信がなく、自分に日本代表が務まる能力がないと思い込

むのは周りの応援してくれた人たちを信じていないのと同じではないか。自分を信じる、僕は強く決意しました。この決意は模擬国連生活の中で一番のターニングポイントであったと確信しています。

国際大会に向け半年弱の間、自分のネガティブ思考や自分に足りないものと戦いながら先の見えないリサーチをしていくのはとても辛いことでした。相方とも何度も衝突しました。何度も全てを投げ出したくなりました。しかし、全日で本気で賞を獲ろうとしていて、でも獲れなかった大使たちのことを思い出すと、気が引き締まり、自分を支えてくれている人たちのためにも絶対にやり抜いてみせると深夜パソコンに向かいながらいつも自分を奮い立たせていました。

そして5月12日、大会は幕を開けました。僕たちの担当する議場は世界銀行、議題は“Financial stability and development in low income countries”でした。僕たちは西アフリカの島国、カーボベルデの外交官として参加しました。

議場内で少しでも目立てるように名刺や政策を印刷したチラシ、ホワイトボード、国旗、そして政策「モバイルバンキングシステムの促進」を携えて会議に臨みました。

会議が始まりました。問題は Unmoderated Caucus (非着席討議：アンモデ)。他の大使に押されてしまい、グループ形成もできないまま右往左往するうちに1日目の午前は終了しました。確かに海外の形式に慣れていなかったのも事実でしたが、二人とも肩に力が入りすぎていたのが一番の原因だったと思います。そこで一度心を落ち着かせ、自分たちの得意な「少人数で結束力の高いグループ」の形成を改めて意識しました。会議の中で自然に自分が「内政」、相方が「外交」を行なったことで結果的に作戦は成功し、小規模のグルー

プでしたが Working Paper (作業文書：WP)、そして DR の提出に成功しました。僕たちのグループはその議場どころかこれまで出場した国内の大会でも見たことがないほど雰囲気がよく、結束力が高いものでした。しかし、独創性が高く、一見実現性がないようにも思ってしまうせいか、「モバイルバンキング」を理解し、納得してもらう作業が難航し、結局僕たちの DR は否決されてしまいました。

確かに DR は否決され、最優秀賞を獲得することもできませんでしたが、間違いなくこれまでで一番の会議行動でした。ここからはリサーチ、そして国際大会を通して自分が感じたことについて書きたいと思います。

一つ目は「自信」。

上でもこのフレーズを書きましたが、本当に大事なことです。僕が昔自分にあまり自信が持てていなかったからこそ、このことを強調したいのです。ここではあまり自分に自信が持てない人に対象を絞りたいと思います。まず実感したのは、自信というのは僕の場合、「もうこれ以上出来ない、全力を尽くしている」と感じたときに生まれました。恐らく、全力でやることで全てに対して開き直ることができたのだと思います。自信の重要性が如実に現れたのが、グループをまとめているときや会議中モバイルバンキングがいろんな大使からバッシングを受けたときでした。“Mobile Banking doesn't work.” 何人かの大使からひたすら責められ続けたときも、辛かったリサーチを乗り越えた自分を信じて、粘り強く交渉しました。自信は良い意味でも悪い意味でも感染するということを忘れないでください。

二つ目は「仲間」。

模擬国連という競技はコミュニケーションの競技でもあります。そして相手はロボットではなく、生身の人間です。まず相方との話をしたいと思います。僕らはたまたまペアを組んだとは思えない

ほど、性格や価値観が違いました。(これまで人生で出会った中で一番考え方が違ったといっても過言ではありません) 食べ物の好みや好きな歌手、趣味も全く合わず、一ヶ月に一回ほどは方向性を巡ってどちらかが爆発し、喧嘩をしました。しかし、なぜそんな僕らが十ヶ月以上一緒に過ごし、数々の練習会、全日本大会、そして国際大会を乗り越えられたのか。それはお互いがそれぞれ自分に持っていないものを持っていたということに尽きると思います。会議においても、僕がグループの雰囲気作りや議論のファシリテーション、相方が本質を突いた高度な議論の展開をすることで相互補完的にグループの質を高めることができました。

相方は自分にないものを絶対に持っているということを忘れないでください。

そして、次は会議で出会う他の大使について。最初に言いたいのは会場にいる大使は自分の敵ではないということ。これを意識するかしないかでグループの質が決まると思います。具体的に言えば、あえて会議とは関係ない部分で相手を褒めること、相手の話を丁寧に聞くこと、雑談(もちろん喋りすぎは良くないですが)などがあると思います。「仲間」になれば(少し悪い考えですが)相手は自分を裏切らないでしょうし、自分の政策により賛成してくれます。そしてそこで出会った仲間、戦友たちとは会議後も友達です。僕はこの「コミュニケーション」の要素がディベートとは違う模擬国連の魅力だと思います。模擬国連とは関係なく使い古された言葉ですが、すべてのことにおいて一人で出来ることには限界があります。模擬国連を通し、仲間を作ること、そして頼ることの重要性を学ぶことができたのは大きな成果だと思います。

ここまで派遣事業を含めた模擬国連生活で得られたことを書かせていただきました。

今回目標としていた「最優秀賞獲得」はかないませんでした。ものすごく悔しいことも確かです。

しかし、これまで模擬国連を通して得られたものは本当にかげがえないものばかりで、たくさん刺激を受けて、ここまで報告書を書きながら、僕は模擬国連を経験することができてよかったと心から感じています。僕は「模擬国連」で得たものを忘れずに、待ち受けているであろう数多くの困難に打ち勝ち、夢に向かって突き進んでいこうと思います。

最後になりますが、こんな僕が国際大会まで戦い抜いてこられたのは決して僕一人の力ではありません。僕がここまでこられたのは、支えてくれた学校の友達や先生方、家族、モギコッカーたち、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆さま、派遣事業に協力してくださった皆さま、大好きな11期派遣団のみんな、そして相方の小塚先輩のおかげです。

すべての「仲間たち」に感謝を込めてこのレポートを締めくくりたいと思います。

本当に、本当にありがとうございました！



田久保 将人

開成高等学校 2年

中2から始めた模擬国連活動。その集大成として、迎えた高校模擬国連国際大会。楽しかったことも、悔しかったことも、心が折れそうになったこともたくさんありましたが、なんとか無事に派遣事業を最後までやりきることができました。国際大会にいたるまでと、短く会議の振り返り、そして僕が模擬国連を通じて感じたことを書きたいと思います。

僕が模擬国連を始めたきっかけは、中2の時に英語の先生から誘われたという、非常に他愛もない理由です。その際に全米派遣のを知り、ペアを組んで練習会に少しずつ出るようになりました。そして高1で迎えた全日本高校模擬国連大会で優秀賞をいただき、夢であった派遣事業への参加が決まりました。

しかし、ここで予測不能の事態が起こりました。中2の頃からペアを組み、ともに全日本大会で賞を勝ち取った相方が急遽国際大会に参加ができなくなってしまいました。ご存知の通り、模擬国連は元々2人で行うものであり、会議戦略・政策は2人で相談しながら決めていきます。また、僕は彼としかペアを組んだ経験がなく、ましてや1人で練習会等に参加したこともありませんでした。話を聞いた時には本当に頭が真っ白になりましたし、一度は参加を断念することを決め、顧問の先生に伝えました。しかし、それから数日間悔しさで他のことが何も手につかず、両親や顧問に再度相談し、1人で国際大会に参加することを決意しました。

準備期間のことは、正直な所ほとんど覚えていません。ちょうど学校関係のことが忙しい時期と国際大会への準備期間が被り、鬼のように忙しい毎日を過ごしていました。物理的なキャパシティが足りなくなり辛いのはもちろんのことですが、一番苦しかったのは、精神的な部分

です。全てのことについて1人で取捨選択やいくつもの判断を自問自答しながらしていく作業は、本当に大変でした。

そして迎えた会議当日。派遣の先輩方から言われたように、お菓子を配ったり、議長に挨拶をしたり、なるべく顔を覚えてもらえるように心がけ、会議に臨みました。Committee Session 1では、日本とは異なるプロシージャーや会議スタイルに翻弄され何もできませんでした。昼休み直前に行われたUnmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ）では、このままではまずいと思ひ、レソト大使とともにアフリカの国々を集め、8カ国のグループを作ることに成功しました。Committee Session 2ではグループでの議論を再開し、順調に始まったように見えました。しかし、議論に集中している間に、いつのまにか他のグループと合流してしまい、いきなり20カ国強の大きなグループになってしまいました。それでもグループの中核に残ろうと必死に食らいつきましたが、次第にポジションを取られ、しまいには大グループの一大使になっていました。こうして会議1日目、このままでは立て直しが効かなくなると思ひ、Working Paper（作業文書：WP）を書いている数カ国と交渉をし、事前に準備していた政策・条文について意見を求め、翌日提出のDraft Resolution（成果文書案：DR）に含めてもらえるように議論をしたいと交渉をしました。Committee Session 3では、ひたすら自国の政策がDRに残るように努力をしました。途中で疲れて周りの大使の喋るスピードについていけなくなることもありましたが、とにかく政策をプッシュし続けました。

結果的に、主に掲げていた3つの政策のうち、2つの政策が残り、僕がいたグループのDRは提出された4つのDRのうち最多の賛成で可決されました。

模擬国連活動の総括として臨んだ派遣事業でしたが、おそらく何かできるようになったこと、

能力が上がったことはほとんどありません（少なくとも僕はそう感じています）。ですが、全日が終わってからの半年間は人生で1番濃いものでしたし、本当に多くのことを学びました。派遣事業の一環である表敬訪問、そして国際大会で強く感じたことをまとめておきます。

- ・ 国連の最終目的は「世界平和」であること、agendaは平和を達成するための要素であること
- ・ 何か大きなものを得るためには、何かを捨てる勇気が必要であること
- ・ 物事が達成できるか否かは、やってみてから考えても遅くないこと
- ・ 気合いって意外と大事
- ・ 人の気持ちは変わる、交渉次第だが決して変わらない部分もあること
- ・ (特に模擬コッカーの人たちへ!) ペアというのは本当に素晴らしい存在であること、日頃からもっとペアには感謝すべき!

最後に、僕らはこの派遣事業が始まる際に一つの問いを与えられました。

「模擬国連とは何ですか？」

月並みな説明をするのであれば、国際人・アントレプレナーシップの育成と表現できると思います。しかし、僕にとって、少なくとも今回の模擬国連は「ただひたすら自分と向き合い、考えること」でした。自分ができる範囲で、自分ができることしかできない。その中で、どうやって会議で日本代表として、カーボヴェルデ大使として何ができて、何をしたくて、どうすればできるのか。考えていないときはなかったと言っても過言ではないと思います。今になって半年を振り返ってみると、ペアがいなかったことは全てにおいて悪いことではなかったのではないかと少し思いますし、相方には心から感謝の気持ちを抱きました（言うまでもないですが、ペアがいた方が何倍も楽しかったと思ひますし、準備期間・会議当日にペアの名前を心の中で何回叫んだかわかりません（笑））。高校

時代に、世界の舞台に登れたことは本当に貴重な経験だったと思いますし、準備・サポートしていただいたグローバル・クラスルーム日本委員会の皆さん、ACCUの皆さん、顧問の先生には本当に感謝しています。

これからの人生で、どんな道に進んでも、僕は「平和」について考えていきたいと思いますし、考える義務があると思います。それが模擬国連を通じて至った僕が今、平和に向けてできることであり、平和へのアプローチとしての結論です。では、皆さんへの質問で締めくくりたいと思います。

----- あなたにとって平和とは何ですか？



小牧 薫子

渋谷教育学園渋谷高等学校 2年

この報告書は、模擬国連が辛いと思う人、あまり好きになれない人にこそ、特に読んでほしいです。なぜなら、昨年の報告会で10期生の報告を聞いていた私がまさにそうだったからです。

それまで会議にはたくさん出ていましたが、その度に自己嫌悪に陥っていました。決議書を猛スピードで作っていき帰国生、周りをまとめていく偉大な先輩方、その議場の中でも重要な役割を担って会議に貢献している同級生。周りにいるすごい人達と自分との落差を実感する模擬国連が、あまり好きにはなれませんでした。私が国際大会まで出るほど成長できたのは、たまたまペアを組むことになった鶴巻明梨のおかげです。まとめるのが上手な彼女にグループの統率をまかせ、私は他のグループと交渉を行うのに専念することが出来ました。そこで初めて、今まで辛かった模擬国連の会議の数々が生きてくることを感じました。元々話すのが得意でない私は、人の話を聞くことで議場を把握することが得意だったり、会議経験を重ねてきたことでタイムマネジメントが得意になっていたりしたことに気が付きました。それでも、全てが順風満帆に行くわけではありませんでした。会議が予想通りに動いたことは一度もないし、完全燃焼したこともありません。しかしだからこそ、少しでも会議に貢献できた時の喜びは大きいし、次の会議につながるのだと思います。

国際大会に向けての約一年間も、正直辛い日々の方が多かったです。満足いく政策はなかなか出来上がらないし、政策発表のプレゼンテーションは上手くできないし、会議直前なのに英語の交渉練習では言葉が出てこないし、心が折れることはたくさんありました。その度に、なんでこんなに大変な思いをしているんだろう、部活

をやりテスト勉強をする普通の高校生活に戻りたい、と思っていました。それでも、次の日の朝には気持ちを切り替えて、また模擬国連に取り組んでいました。それをさせたのは、ここまで準備した道のりで困難を乗り越えてきたという自信、選ばれた責任感、全力でやった先に何かがあるのか見てみたいという好奇心でした。

そして、本番、会議一日目、議場は想定内の流れであったため、日本での会議以上に、自分が議場のグループの立場や意見を把握できていることに満足し、国際大会でも私達のやり方が通用したことに自信を持っていました。

会議二日目、一日目の自信が音を立てて崩れていきました。私たちは、他のグループとコンバイン（他のグループとの意見統合）する道筋を立てて会議に臨みました。しかし私たちのグループのリーダーはそれに反対し、グループ内で対立してしまいました。私は意見と意見がぶつかり合うその場で、何もしゃべることが出来ずに、ただ同じ意見を持つ大使が力強く語るのに頷くことしかできませんでした。小さな声で二言三言喋って、議論に参加しているフリをすることしかできませんでした。会議が自分たちの思う方向に行かなくなってからは、もう帰りたい、諦めたい、と思って立ち直ることが出来ませんでした。今まで取り組んできたときは立ち直ることができたのに、この時はできませんでした。アメリカの高校生にグワーツと話されて反論することが出来ずに、日本語だったら説得できるのに、と思ってしまったことは情けなくて忘れられません。議題についても、議場の流れについても、自分が一番理解できていた自負があります。しかし、それを生かして会議に貢献することはできませんでした。

Honorable Mention Award の発表で「Cape Verde」が呼ばれた瞬間は一生忘れません。あの時こみあげてきた涙は、会議二日間への思いだけでなく、ペアと共に乗り越えてきたこの1年

間への思いでした。今まで取り組んできたことがこのように形になったことは、次のステップに進むときに、必ず私の背中を押してくれるはずです。この会議での悔しい気持ちは、また世界の場に立って、何らかの形で晴らしたいです。

最後になりますが、この場を借りて支えてくださった皆様に御礼を申し上げます。リサーチにあたって助言をくださった高校の先生方、応援してくれた家族、友達、頼もしく偉大な OGOB の先輩方、渋渋模擬国連部のみんなにどれほど支えられたかわかりません。また、グローバル・クラスルーム日本委員会の皆さま、このような素晴らしい機会を与えていただき、本当にありがとうございました。そして、弱気になる私に喝を入れてくださった室崎先生、私を変えてくれたパートナーの明梨と三人四脚で歩んできた日々は、私の一生の糧になると思います。本当にありがとうございました。



鶴巻 明梨

渋谷教育学園渋谷高等学校2年

「模擬国連をすることは世界平和につながるのか？」これは全米派遣前に私が自分に課した一つの問いです。派遣一か月前、OB,OGの先輩方と11期で英語のグループディスカッションをする機会がありました。一つのテーマが“What is one thing we can do for peace?”。私の尊敬する先輩が“DO MUN!”と言いました。でも私は先輩のその回答には納得できませんでした。たかが高校模擬国連をすることで世界平和に繋がるわけがないからです。この先輩は去年の派遣でそう思ったに違いない、私もそう思えるだろうか、と自分にこの問いを課しました。派遣を終えた私なりの結論は「繋がらない」でした。正確に言えば、「模擬国連に参加するだけでは繋がらない。」です。所詮高校模擬国連は国際法も学んでいない高校生のアイデア力、話す力勝負などところがあります。参加することに満足してはいけない競技だと思えます。では高校模擬国連に興味はないのか。これには私は自信をもって「ある」と答えます。私が模擬国連を通して伸ばすことができたもの、そして私なりの高校模擬国連の存在意義について、NY派遣の経験を絡めながら皆さんにお伝えできたらと思います。

まず私個人が模擬国連で伸ばすことができたものは大きく3つです。精神力、自己分析力そして行動力です。持久系スポーツではないのだから精神力が鍛えられるわけがないと思われるかもしれませんが。私は、模擬国連は持久系スポーツだと思えます。議題を理解したと思ったら違っているなんてことは多々あります。私達が参加した死刑制度の議論においては最初の一か月以上、「どのように死刑存置国を減らすか」を考えていました。実際リサーチと議題解説書の読み込みをやり直したら「どのように執行数を減らすか」でした。準備段階でも何度も心が折れるという

のに、会議本番ではもっと折れます。国際大会では、初日はグループのスポンサー（成果文書の提出国）としてそこそこ上手く終わり、でもこのままリーダー国に流されているのは埋もれてしまう、芯をもって行動しようと迎えた二日目。コンバイン（他のグループとの意見統合）を推したものの結局反対派の意見を動かすことができず、コンバインしないことに。コンバインの代わりにシグナトリー（成果文書の署名国）集め交渉が始まるも上手く存在感を発揮することができず、何度も帰りたと思いました。でも帰るわけにはいかないし、Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ）が始まれば席で座っているわけにもいかない。もう霧散しそうな精神力をかき集めて席から動いて、条文への質問に答えたり、シグナトリー交渉をしに来る他グループの大使の話の聞いたりしていました。今は議論を共有したりコンバインを進めようとしたりする姿勢が評価されたのだろうかと考えていますが、“The honorable mention award goes to… Cape Verde.”と呼ばれたときは喜びよりも理解できないという気持ちの方が強かったです。準備期間で半年、一つの議題に向き合い続け、会議中の二日間は頭も足もフル回転で乗り切ろうとする中で確実に精神力を鍛えられたと思います。

二つ目は自己分析力です。模擬国連には様々な大使がいます。大使が多い議場になるほど、自己分析を通して自分の強みを最大化して差別化することが必要になります。例えば国際大会においては英語力の壁は弱みとして確実でした。英語力自体はオンライン英会話でなるべく伸ばすとして、さらに英語力以外でグループを纏める大使となるための材料を考えました。そしてペアと「議論の可視化ができる大使」であろうと心がけました。具体的にはホワイトボードやスケッチブックを使って議論を整理したり、人数が多い時はポストイットを使って観点を落とさないように心がけたりしました。アメリカ人

をはじめとする参加者が論点の順序を気にせず思ったことをどんどん出していくタイプのテンポの速い議論だったこともあり、本番で活かすことができました。

最後に、行動力です。特に「今まで躊躇していたことを行動に移す力」です。国際大会では、「議長をはじめとするフロントとのコミュニケーション」を意識しました。国際大会は全日本大会と比べあまりにも不確定要素が多いです。Working Paper（作業文書：WP）やDraft Resolution（成果文書案：DR）の提出時間は事前に決まっていない、どの先輩方、先生方にお話を伺っても、結論は「議長による」に達してしまう。数えだしたらキリがありません。わからない議事進行をそのままにせずにモーションを出して質問してみることを意識しました。幸いにも議長が教育的模擬国連を重視する方であったため、質問を出しても快く答えて下さりました。日本での自分では「そんな初心者に見られそうなことはしない！」と意地を張っていたと思います。しかし、国際大会において自分が初心者なのは紛れもない事実であり、「やらないうで後悔よりやっけて後悔！」と自分に言い聞かせて行動に移すことができました。今までの会議から一つだけでも変わることを毎回毎回の課題にする中で行動力が鍛えられました。

さて、これらは私個人が模擬国連に鍛えられたと感じる力です。ではもっと大きな、高校模擬国連の存在意義とはなんのでしょうか。一つは、BG、リサーチを通して、国際問題をトピック別に学ぶことができることだと思います。実際の社会では複雑に絡まりあっている国際問題を、意図的に部分抽出して整理できる機会はとても貴重です。そしてそれ以上に、私は「高校生が国際問題を議論できるプラットフォームであること」自体に存在意義を見出しています。もちろん国際法を反映した内容でなかったり、毎度毎度、教育や資金援助が解決案として提案され

たりします。それでも、調子に乗っているよねとか結局何もわかっていないでしょとか言われることなく、参加している間だけは国の代表になりきって一人前に議論する機会があること自体が意義だと私は考えています。最初の私の答えに戻りましょう。「模擬国連に参加すること自体は平和に繋がらない。」“we're marine vets, your kindness counts.”初日の表敬訪問に向かう道のりの中、ホームレス男女組が路上に置いていた缶に書かれていました。彼らは気温十度ぐらいのNYでお互いを温めあうように座っていました。ホテル内の大きな会議室で、アメリカ人が提案したCreation of the African Union Fund for reforming judicial systemをいいねいいねと流しながら、何かもう全てを諦めているような表情で道路を見つめているホームレスとは目が合わないように無視している自分がいました。模擬国連に参加するのはとても刺激的なことです。しかし、その一方でそれに満足してはいけなないとNY派遣を通して強く感じました。俯瞰的に国際問題を学ぶ中で増やした引き出し、そして議論と現実の差に感じたもやもやを基に、実際に行動に起こした時、高校模擬国連活動は平和に繋がると言えると思います。そして派遣生としてそういう人でありたいと思います。

最後に、この活動を支えてくださった全ての方に深く御礼申し上げます。辛いことも何度もペアと共有しましたがそれを乗り越えることができたのは皆様のおかげです。本当にありがとうございました。



小寺 圭吾

渋谷教育学園幕張高等学校3年

日本に帰国した直後は、心に大きな穴が空いたような空虚感、身体の疲労、会議での悔しさ、派遣が終わった達成感、多くの方への申し訳なさ感謝、今でも解明できていない怒りなど、様々な感情が入り乱れ、時には涙し、笑い、怒り、未熟な17歳の私には抱えきれない苦しさがありました。しかし一週間がたった今、少し心身ともに落ち着きを取り戻しつつあり、自分の心中と周りへの感謝を、派遣事業を振り返りながら報告させていただきたいと思います。

いつから模擬国連を始めたかは忘れましたが、私は中学校3年生の時に模擬国連同好会を創設するほど模擬国連の魅力にとりつかれていました。多くの国を担当することで旅行したかのような気持ちになれ、国際問題を様々な視点から見るができるようになったからです。しかし、最も強い理由は、模擬国連を通じて友達がたくさんできたからです。それもただの友達ではありません。国際社会が抱える問題に関心を持ち、議論を楽しむ優秀な高校生たちです。

優秀な高校生たちの意識は高く、時には会議と関係のない争いに苦しめられることもありました。幾度となく、こんなことはやめようと、思いました。しかし、私は模擬国連を通して知り合った友達と友達であり続けたい、その一心で模擬国連を続けてきました。この思いがなければ複雑な人間関係に発展する前にもうやめていたと思います。そして、気づけば全日本大会では自分の120%の力を発揮することができ、国際大会の場に自分はいました。

私たちは高校模擬国連国際大会へカーボヴェルデ大使として参加し、International Maritime Organization (IMO: 国際海事機関)にてMaritime Pollution (海洋汚染)について話

しました。担当会議が決まって、まず私はBackground Guide (BG: 議題解説書)の内容とその物理的薄さに驚きました。二日間で話し合うには広すぎる議題であることは明らかなのに、論点も設定せず、議題の背景もまともに解説しない文章に驚きました。海洋汚染という一言だけで、一から、いえ、ゼロから調べ始めなければなりません。会議でなにが話し合われるかなど考えず、とにかく、海洋汚染という名の付く資料全てに目を通した結果、現在は海洋汚染の8割が陸上に起因しているにもかかわらず、法的拘束力のある対処がなされていないことに気づいたので、これを政策として持つという方針を固めました。その後、さらなるリサーチとアドバイスから、「発展途上国における下水処理施設の建設」という一見・一聞しただけで内容がわかりやすく、発展途上国であるカーボヴェルデに利益のあるものをメインの政策として、渡米しました。

1st SessionはModerated Caucus (着席討議: モデ)で議論し、2nd SessionではWorking Paper (作業文書: WP)を作成、3rd, 4th Sessionはマージ (コンバイン、他のグループとの意見統合)してDraft Resolution (成果文書案: DR)を作成、さらに投票というのが会議の大まかな流れでした。私たちは一日目から、日本で計画した通り、島嶼国と一部環境意識の高い先進国を巻き込んだグループを形成しました。しかし、二日目のマージを行う際、グループのリーダー的役割を別の大使にもっていかれてしまい、彼らが最優秀大使賞を受賞しました。振り返ってみると、初日から彼らはスピーチが秀でており、リーダーシップを発揮していて、何一つ敵いませんでした。しかし、様々なドラマを経て、最後に議長の口から「For the Honorable Mention, Cape Verde!」という言葉が聞こえてきたときは、純粹にうれしかったです。その場で

すぐにパートナーを抱きしめたいほど嬉しかったです。そしてこの素晴らしい経験を通して、私は今後の自分の人生における二つの大きな課題を見つけました。

一つ目は「変化を恐れない」こと。私はニューヨークに住んでいたことがあります。帰国から7年以上がたち、英語が抜けていることに気づいていたのに、目を背け続けていました。そのことに気づいたのは、恥ずかしいことに、会議直前に各国大使への挨拶をしているときでした。そして英語への恐怖を引きずり、緊張と焦りで頭が真っ白な状態で会議は始まりました。スピーチやModerated Caucusでの他国の発言も頭に入らず、とにかく焦っていました。そんな中、カーボヴェルデにModerated Caucusで発言の機会が回ってきました。議長は各国を万遍なく指名しようとしていたため、ここで失敗すれば今後の発言チャンスがなくなり、国際大会の全てが終わってしまうという場面であり、極度の緊張が私を襲い続けていました。しかし、パートナーは冷静でした。果たして本当に冷静だったかどうかは本人に訊かないとわかりませんが、少なくとも私よりは冷静で、日本で決めた分担通りに彼女は颯爽と、堂々と、カーボヴェルデという知名度の低い国の政策を短い時間で広めてくれたのです。その姿を見て、私は一滴だけ涙が出て、ようやく笑顔ができました。ある程度の冷静さも取り戻しました。そして彼女の発言のあとはカーボヴェルデ宛のメモがとまらず、私はなんとかそれを的確に処理できたと思います。パートナーが全日本大会と変わらぬ、いや、それ以上の発言を最初に決めたその姿は私にとって女神そのものでした。まさに「地獄で仏」でした。私は、環境の変化に影響されていないかのような彼女の振る舞いを見習いたいと思いましたし、周囲に流されないことは自分にとっての課題であると感じました。

二つ目の課題は「伝える気持ちをもつ」こと。

表敬訪問先、会議直前のゲストスピーカー、閉会式での国連事務総長、全ての方々から「なにかを伝えよう」という気持ちを強く感じました。ある表敬訪問先では「遠路はるばる日本から来て、学びに対して積極的な姿勢をもってくれてありがとう」とさえ言われました。また国際大会でも、最初は自分の意見を思うように英語で言えず戸惑っていても、何かを伝えたい一心で他の大使に話しかけていれば自分が納得のいく表現が見つかるまで待ってくれます。時にはお互い伝えたいことが強すぎて衝突することもあります。やる気のない人に一方的に話しかけるよりはそうやって衝突する方がよっぽど楽しいです。なにかを伝えるという心を忘れずに人と接することが、なによりも重要なのだと感じました。

そして、ここまで連れてきてくれたパートナーには感謝と謝罪をしなければなりません。国際大会での失敗のほとんどは自分の責任で、準備不足と実力不足が仇となってしまいました。国際大会でのアワードは彼女一人でもとれたのではないかと、自分がいなければ最優秀賞をとれたのではないかと思います。中学校3年生の頃から、書類審査での落選、二回目の全日本大会、国際大会と多くの苦楽をともにしてきて、最も自分の心を開ける相手です。世界一の大使にはなれませんでした。確かに世界一のペアにはなれませんでした。

国際大会では自分の実力を発揮できないことが多く、悔しい思いを多くしました。しかし、自分の実力が100%発揮できなかったとしても、それも一つの大きな経験です。国際大会への派遣を通して得たものは将来必ず自分の糧となる気がします。アメリカ・韓国・中国・イタリア・レバノンなど世界各国の未来を担う優秀な高校生たちと議論しあったという自負、大勢の前で自分の意見を訴えかけたときの景色、それら全

ては模擬国連をここまで続けてきたからこそ得ることのできた経験です。最後にはなりましたが、この素晴らしい経験をさせてくださったグローバルクラスルーム日本委員会の理事・研究の方々、ACCUの皆様、渋谷教育学園幕張高等学校の先生方、先輩方、そして両親に厚く御礼申し上げます。



高橋 千佳

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

思い返せば、高1の夏からの1年半は背水の陣で駆け抜けてきました。稚拙な文章ですが、はじめに国際大会までの道のりを少し振り返ってみようと思います。

模擬国連を始めて1年半。思いがけず校内選考を通過した私は全日本大会に応募することになりました。選考課題に一日の大部分を費やし、学校の先生方に添削をしていただきながら何度も修正を重ねたのですが、結果は落選。全日本大会に門前払いされてしまったという虚無感を味わいながらも、ペアの小寺とは「来年は絶対にリベンジしよう」と固い決意を共有したのを覚えています。

私にとって書類選考で落選したことは、それまでの模擬国連との向き合い方を考え直す転機となりました。選考課題の執筆には様々な国際問題の知識が求められますが、私には断片的な知識しかなかったために執筆の際には大量のリサーチを必要としました。もし普段から国際問題に目を向けていれば、またそれに対する自分の意見をしっかりと持っていれば、課題ではそれほど苦労しなかったはずです。国内外のニュースに敏感になること、一つひとつの練習会のためにリサーチを徹底すること—これらは1年後に結果を出すための二つの心構えでした。

あれからあっという間に1年が過ぎ、小寺・高橋ペアはようやく全日本大会への出場資格を得ることができました。この頃には書店で新書を読むことやパソコンでニュースをチェックすることが日課となり、模擬国連は生活の大部分を占めるようになります。

全日本大会で感じたことは、全国の高校生の勢いの良さでした。模擬国連の競技人口の増加に伴い議論のレベルも上がっているだろうとの

覚悟はしていたのですが、初日終了の時点で Working Paper（作業文書：WP）グループが7つも存在するほどの難しい展開になるとは思いませんでした。日本人でもここまで己を主張するのだから、国際大会の参加者では尚更だろうと感じ、国際大会への派遣が決まってからは英語力の強化と、話し方の改善を意識するようにしました。

今回の会議の醍醐味は、二日目のコンバイン（他のグループとの意見統合）交渉にありました。初日の時点でカーボヴェルデは途上国や島嶼国を中心とする、比較的小さな WP グループをまとめていました。二日目のミッションは、この WP のシグナトリー（成果文書の署名国）をより多く獲得することでした。グループ内外で私は積極的に動き、各大使の質問に答えるなど自分なりに適切な行動ができていたと思っていました。しかし 3rd session 中盤の Unmoderated Caucus（非着席討議：アンモデ）でポルトガル主導の WP グループにコンバイン交渉を持ちかけられ、アンモデ終了までにその WP グループに入るかどうか教えてと、決断を迫られました。それまで賞を狙って行動していた私は、「カーボヴェルデはこの交渉に応じず、自分たちだけで DR をつくり、日本の高校生の代表としての実力を示すべきだ」と一瞬思いました。模擬国連の本質とは異なる軽率な考えですが、情けないことにそのような考えが頭をよぎったのです。しかしアンモデ終了時刻が迫る中、コンバインについて自分たちの WP グループ内でも意見が分かれるようになり、私は模擬国連のもっとも基本的で大切なことを思い出します。私たちカーボヴェルデ大使が守るべきは自分たちの受賞よりもカーボヴェルデや島嶼国、途上国の海。対立するためではなく、コンセンサスのために議論しているのです。コンバイン交渉に応じずに自分たちの WP を Draft Resolution（成果文書案：DR）としてそのまま提出しても良かったの

ですが、人数が少なかったために投票では圧倒的に不利になるだろうと思いました。これが可決されなかったら、カーボヴェルデはもちろん、初日に私たちの政策を快く受け入れてくれた島嶼国の国益は達成されません。こんなところで、会議準備を含む半年間の努力を棒に振るわけにはいきませんでした。やはりポルトガルの WP とコンバインする方が無難だという結論に至り、私たちの WP が強く主張する文言のみを抽出して組み込んでもらうことにしました。

結果的にカーボヴェルデが加入した（吸収された）DR は可決されたので、一見私たちの国益は達成されたように見えました。しかし、会議終了後に議長から受け取った成果文書のデータを帰りの飛行機で確認してみると、カーボヴェルデが苦勞して書き上げた肝心な文言「（下水処理場建設について）有償支援による循環型の支援形態を推奨する」がどこにも見当たらなかったのです。下水処理場建設のプロセスはコンバイン交渉における唯一の対立点でした。これを守らなければ持続可能な支援形態は永遠に不可能だろうというのがこちらの主張です。しかし、結果として先進国のグループは我々島嶼国の意見を聞き入れてくれず、カーボヴェルデのトップラインは達成できなかったということになります。しかもその事実には帰りの飛行機で気付いたのですから、これほど無念なことはありません。細かいところまで行き届いていなかった自らの会議行動が悔やまれます。

ポルトガルに私たちの WP が吸収された瞬間はペアや同盟国の大使に申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、冷静になった今考えてみると、あの場面はまさに今の国連の縮図だったのかもしれない。先進国も途上国も国益を達成しなければならぬけれど、発言力の弱い途上国は自分たちの主張に耳を傾けてもらえず、力のある先進国に有利な形で議論が進められていく。立場の弱い国が同盟を形成する意義や、国

際的な議論の場での途上国の苦勞が少し理解できた気がします。したがって私があのような状況に立たされたことは大切な経験でしたし、これこそが今回の会議における一番の収穫だったとも言えます。

私は練習会や模擬国連同好会の活動、大会などで何度も悔しい思いをしてきましたが、周りの人に支えられ続けて高校模擬国連の集大成となる国際大会で全力を尽くすことができました。特に、ペアには大いに支えられました。短気で、感情をすぐに顔に出してしまう私に対して彼は常に冷静で、いつもシチュエーションに応じた判断をしていました。全日本大会や国際大会では精神的に支えられましたし、中3の時に私を練習会に誘ってくれることがなければ今の私はなかったと考えると感謝してもしきれません。こんな私をペアに選んでくれてありがとう。

最後に、私は模擬国連に関わっていなければ辛い思いや悔しい思いをすることはありませんでしたが、模擬国連に関わっていなければこんなに貴重な経験をするのではなく、今後活かせる力を得ることもなく、素敵な仲間に出会うこともなかったはずです。ニューヨークで過ごした1週間はとても有意義でしたし、何より模擬国連の大使として互いに切磋琢磨できる仲間との絆ができたことが嬉しかったです。国際大会はゴールではなく、あくまで将来の夢を達成するための通過点かもしれませんが、この経験は間違いなく自分の理想像に近づくための大きな一歩となりました。派遣をサポートしてくださった皆様には心から感謝しています。ありがとうございました。

青木 溪

桐蔭学園中等教育学校3年

私の派遣事業の所感の記述に先立ち、派遣事業をサポートしてくれた全ての人たちに感謝の意を表します。特に、実際に引率して下さったグローバル・クラスルーム日本委員会の大学生三人、ACCUの青木さん、団長の米山先生、各学校の引率の先生の方々には感謝してもしきれないくらいです。本当にありがとうございます。

さて、この報告書は大きく分けて二つのことについて記そうと思います。一つは、「大会含めた派遣事業の所感や派遣を通して得たこと」。主に二つのことが自分の心に刻まれたと思います。一つ目は、「積極的になること。躊躇わないこと」です。今までの自分の行動を部分的であるかもしれないが、振り返ってみると、自分が相手にして欲しいことがあっても、相手の都合や顔色等を伺って、できなくても仕方がないと妥協する場面がとても多かったように思います。国際大会では、自分の英語での発信力・伝達力の欠如も関連して、自分の意見を述べることを躊躇して、「こうすればいいのに」、「なんでこうしないんだ」と思う場面が多々ありました。今思い返してみれば、そう思った場面で、遠慮することなく意見を述べることができているならば、また別の世界が見えたのかもしれない。無論、自分の要求を何から何まで遠慮なく他人に押しつけることがいいとは限りません。時には相手の都合等も考えながら行動することがやはり肝要ですが、今後は、積極的に他者と意見共有するなり、他者に自分の思っていることを提案するなどして、遠慮しがちな自分から卒業し、新たな自分に出会えるよう、日常生活を送っていきたいです。

二つ目は、かなり漠然としていますが、自分の世界が大きくなったように思います。これは

会議というより派遣団の自分を除いた10人との関わりを通してそうなったように思います。大きくなった最大の要因は、各々が様々なトピックに対して根拠も揃えて、自分の意見を持ち、それを堂々と述べられることや、将来像が明確に持っている人が多かったことだと確信しています。恥ずかしながらも、自分は或る問題に対して、大した意見もいうことができなく、将来像についても、「この職業に就きたい」といった程度の曖昧なものであります。しかし、派遣団のそういった姿を見て、自分も帰国後は、目にした問題について、或る程度自分の中で整理し、明確な根拠を持って、自分の中での見解を作るようにしています。この一連の流れはまだ始めたばかりなので、まだまだ自分は全然、派遣団のみんなのように明確な根拠を持って、自分の意見を堂々と述べられませんが、継続していくことで自分の意見を他者にわかりやすく発信できる人になりたいです。

ここまで、今回の渡米を通して自分が思ったことを記してきましたが、最後に、これから模擬国連を始める、あるいは今模擬国連をしている高校生に向けたメッセージを記そうと思います。まずこれから模擬国連を始めようとする人たちへ。人によって模擬国連に対する考え方は異なりますが、自分は、模擬国連は奥が深いもので、経験の数だけ得られるものも多くなると思っています。なので、まずは、思い切って模擬国連に飛び込んでみてください。飛び込んだ結果、模擬国連の内実や、そこですることなど、色々わかってくると思います。はじめは思うようにできず、周りの人が自分より輝いて見えて、劣等感を感じることもあるかもしれませんが、上述の通り、経験がものをいう競技なので、是非飛び込んでください。

次に、今まで或る程度模擬国連を経験してきた人たちへ。そういう人たちは、今までの会議経験をもとにして、「自分の模擬国連スタイル」を確立して欲しいです。もう少し具体的に言うとすると、「会議準備は何をするか、会議ではこういう

ことを意識して会議に臨む、会議での自分の立ち位置は…」というようなことです。派遣団の模擬国連の立ち振る舞いを見たり、聞いたりすると、各々それが確立しているように思います。自分の模擬国連スタイルを確立していくことは、場合によっては思いもよらぬ困難が立ちはだかることもあります。特に、会議で心がけることや、会議での自分の立ち位置を決めることは、経験談からいくと、自分の長所・短所までを考慮しなくてはいけなくなり、自分について考えてみなくてはいけなくなることもあります。しかし、是非ともこの困難から逃げないで欲しいのです。このような困難を乗り越える過程で、得られることは交渉力やスピーチ力をもしかしたら凌ぐものかもしれません。ひいては自我の変革も引き起こします。現に、自分は模擬国連を通して、自我の変革が起こったと確信しています。また、辛い時は会議で知り合った模擬国連をやっている人に相談してみるのも手です。彼ら、彼女らはそれぞれすばらしいものを持っている人なので、そういった人と触れ合う機会としても、周りとのコミュニケーションをとることを勧めます。きっと自分に正の影響をもたらします。このように長々と書いてきましたが、一意見に過ぎず、絶対視できないものなので、これに従う必要はありませんが、参考にして頂けると幸いです。皆さんの模擬国連を通して、一回り、ふた回り大きく進歩することを切に祈るばかりです。これを以って、自分の報告書としたいと思います。



高橋 遼

桐蔭学園中等教育学校3年

国際大会で私は非常に悔しい経験をしました。それは、伝えたいことがあるのにも関わらず、言えない、伝わらないという状況を多く経験したことです。私には議場で一番会議準備をして臨んだ自信がありました。一番、有効的かつ実効性のある政策を持ち込んだ自信がありました。一番、その時々で何をしなくてはいけないのか、今後何をしなくてはいけないのかわかっている自信がありました。でも、それを伝えきれませんでした。そこには、私自身の人としての魅力、他の大使と信頼関係を築けていたかなど様々な課題があると思いますが、語学力が一番大きかったと思います。例えどんなに良いことを考えていても、アイデアを持っていても、結局それを伝えられないと何も変わりません。その伝達の過程で最も大切なのは、やはり言語だと思いません。表情やジェスチャーも勿論とても大切ですが、多くの場合は言語による伝達が出来ていないと自分の意図は伝わりません。会議中に味わった、伝えたいことが伝わらないという状況は本当に辛かったし、悔しかったです。英語を完璧と言わないまでもスラスラと話せたらと何度も思いました。初めて心の底から英語を話せるようになりたいと思った瞬間でした。自分の語学力を磨いて、日本人ではなくても、自分が伝えたいことを伝えられるようになりたい、逆に相手が伝えようとしていることを正確に理解できるようになりたいです。また、自分の意図すること、意思を伝える手段である、自分の言葉をもっと大切に、相手に伝えたいことを確実にそしてより強く伝えられる方法を探っていこうと思います。

ただ、そんな悔しい経験を通して一つ確信したこともあります。自分の武器です。それは状

況判断能力などの「横の視野の広さ」と先を読む力などの「縦の視野の広さ」、また計画力や戦略などこれらに準ずるものです。言い換えれば、「今何が起きえているのか、何が今後起きうるのかを迅速かつ正確にとらえ、それに対して必要なアプローチを多角的にとらえる」ことです。これは、大会前に薄々感じていましたが、大会が終わって自信を持てるようになりました。確かに、国際大会は巧みな交渉能力や人間性など非常に高度なものが多岐にわたって求められます。しかし、私たちの議場に議場全体のことや今後の行動について意識出来ている、またはそのために行動できている大使は他にはいないように思いました。しかし、先ほども言ったようにそれを伝えきれませんでした。その自分の力を出せなかった、いかせなかったそれが非常に悔しかったです。しかし、この力は必ず自分の武器になります。この武器をさらに鍛えて、自分の将来に、また何か人のためになることのために活かしていきたいです。

他の派遣生と1週間寝食を共にする中で強く感じたことがあります。それは皆、「大きな目標・ビジョンを持ち、そのための手段を考え続け、その手段を全力で行動している」ということです。私はいつも物事を現在の延長で考えてしまいます。今の自分の状況から目標を設定したり、新しいことを始めるよりも既存の物を修正することによって状況の改善を試みたり。しかし、彼らは「自分は本当に何がしたいのか」を考えていたし、それを口に出し、そのために何ができるのかを必死に考えて行動していたように見えました。表敬訪問で訪れた国際連合の軍縮担当上級代表（事務次長）である中満泉さんも、「私たちのすべきことは大きなビジョンを提供し、そこへのアプローチ方法を思考し、提示し、共通の価値観を気づくこと」であると仰っていました。大きなことを達成する人や人を動かせるような人はこうなんだろうなと思いました。そ

して彼らはまた常に前を向いていました。「自分が本当にやりたいこと、やるべきこと」を強く思って、そのために必死にならない限りは大きなことは達成しえないと思います。なので、今後は「本当に自分がしたいことは何か」という理想を常に持って、今まで以上に全力で努力していこうと思います。

最後に、私が今回模擬国連国際大会に出場できたのは、ペアや学校の先生、両親のみならず、一緒に渡米した11期派遣団のみんなやグローバルクラスルーム日本委員会の大学生の方々、ユネスコ・アジア文化センターの方々や協賛企業の方々のお力添えがあって初めて達成できたものです。心から感謝の意を表したいと思います。本当に有難う御座いました。また、模擬国連はスピーチ能力や交渉能力等が向上する活動であると言われますが、私はそれにとどまらない活動だと思っています。得られたいものが得られる活動であると心の底から思っています。人間性、大切な仲間など人生に大きな影響を与える機会を与えてくれます。なので、まだ模擬国連をやったことのない人には一度会議に参加してみしてほしいです。既に参加している人にはもっと真剣に取り組んでほしいです。その価値が十分ある活動だと確信しています。



北口 智章

灘高等学校3年

単に国際連合の会議を模して国際問題を議論するのが、模擬国連なのでしょうか。否、模擬国連は教育活動なのです。一国の大使になりきり、国際社会や国際問題に対する理解を深め、英語力や交渉術を培う教育活動なのです。そこには、本家の国連には無い「教育者の視点」が介在してきます。競技の場を支配するのは、各国の首脳が共有している「国際社会の暗黙のルール」ではありません。参加する学生に何を学ばせ、何を経験させたいのかという「教育者の論理」が力を持っているのです。

さて、模擬国連活動のモチベーションの一つとして、各会議で優秀者に与えられる賞があることは、今さら強調するまでもないことです。では、模擬国連における「優秀者」とは、どのような者を指すのでしょうか。もちろんその定義は、各会議の目的や参加者層によって当然異なるでしょうが、「教育者の論理」という原理が共有されている以上、根本には共通点が見出せるはずです。少し前の私なら、こう即答したことでしょう。「最も戦略的に行動し、国益を最大化した大使が評価されるのだ」と。

しかし、渡米派遣を終えた今、そう述べることに、私は若干の躊躇を覚えます。それは、今回の国際大会で、「勝負には負けたのに」優秀賞を受賞できたためです。その受賞は、実に意外であり、同時に「理想的な模擬国連のあり方」の検討を促すものでした。

2年前の全日本大会、アメリカ大使を務めた私は、同輩のロシア大使・カナダ大使に手痛い敗北を喫しました。この苦い経験が、私の模擬国連活動の出発点となりました。それから約1年間、全日本大会での経験をベースとして、幾

度となく会議行動のシミュレーションを繰り返し、「全日本大会での勝ち方」を模索しました。政策の活用方法、グループの作り方・動かし方、ペア間での分担。積み上げた戦略の多くは、昨年全日本大会で実を結びました。まさに「完璧」という表現が相応しい勝利体験でした。ただ、この過程で私が獲得したのは、あくまでも「全日本大会での勝ち方」に過ぎませんでした。全日本大会と似て非なる国際大会には、全く新しい戦略をもって臨む必要がありました。

新たな戦略のキーワードは「不確定要素の排除」でした。議長裁量、スポンサー（成果文書の提出国）の限定、マージ（コンバイン、他のグループとの意見統合）の不公平性、現地高校生の英語力。これらは、会議の流れを大きく左右する一方で、私たちにとっては、事前の予測が難しいブラックボックスです。そのような「不確定要素」の影響を最小化する会議行動を心掛け、加えて、最も信頼のおけるペアの存在を始めとする「確定要素」を味方につけることが、勝利の必要条件だと考えたのです。

けれども、現実の厳しさは、我々の想定を遥かに上回ってきました。その最たるものは、議場に並存する5つのグループを統合させ、60近い国が所属する1つの巨大なグループを形成するよう促す、無茶な議長の命令でした。議長の命令は「絶対」です。しかし、1つのグループに用意されたスポンサーの枠は、たったの5つ。議長へのアピールに繋がる5枚のプラチナチケットを巡り、大使の間で熾烈な争いが生じたことは、想像に難くないでしょう。そのスポンサー枠の争いに、カーボヴェルデは敗れました。より正確に言うと、その争いに参加することすらできませんでした。カーボヴェルデが、巨大なグループに秩序を持たせようと齟齬している間に、他のグループのリーダーたちは、裏でスポンサーを決定する交渉を行っていたので

す。気づいた時には、手遅れでした。

彼らは「競技としての模擬国連」をよく理解している大使たちでした。ここまで巨大なグループをまとめ上げることなど、どだい不可能なことです。会議の後半に限って言えば、議場の混乱を余所目にスポンサー枠の争いに動しむことが、最も「戦略的」な会議行動であったのです。そう頭では納得しつつも、私は彼らのことを軽蔑していました。「このような大使の姿が、模擬国連における『正しさ』なのだろうか」。ふと湧きあがった疑問に、私は苛まれました。

模擬国連経験者として、彼らの会議行動を肯定することは難しく、しかし一方で、模擬国連を徹底的に「競技」として分析し、「いかに上手く勝つか」を第一に考えてきた者として、戦略の価値もまた、容易には否定し難かったのです。思えば、全日本大会では、勝利のための「戦略のベクトル」と、「理想的な会議行動のベクトル」が同じ方向を向いていたために、両者の違いを明確に認識する必要が無かったのです。その二つのベクトルは、共に「グループ全体あるいは議場全体を俯瞰的に把握しながら、常により多くの大使に影響を与え続ける大使像」を示していました。「賞は欲しいし、戦略を欠かすことはできない」。その気持ちは、痛いほど理解できません。ただ、そのためにスポンサー枠の争いに終始するというのは、私の目には、完全に本質を見失っていることのように映りました。

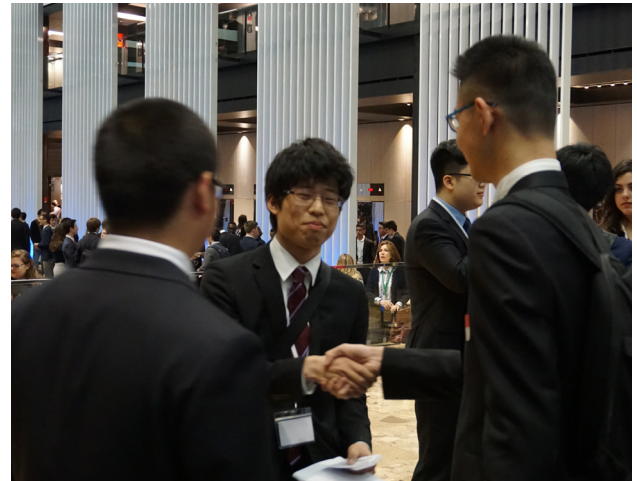
いくら御託を並べても、「敗北」という事実が変わりはありません。会議2日目の昼、会場となったホテルのロビーで私が目の当たりにしたのは、スポンサー枠の争いに勝利した大使の笑顔と、ペアの柳津君の涙でした。そのあまりにも露骨な好対照は、ひどく残酷で、とても耐えられないものでした。最悪の気分を迎えた受賞国の発表。時間が一瞬、止まりました。「勝負には負けた」はずのカーボヴェルデが、議長から

呼ばれたのです。その時の驚き、そして喜びは、例えようもありません。その一方、スポンサー枠に最後まで固執していた南スーダンとカナダの名前が呼ばれることはありませんでした。

カーボヴェルデが受賞し、南スーダンが賞を逃した理由の考察には、「議長の思考回路」の読み解きが不可欠です。「模擬国連＝競技」という参加者としての見方を一旦忘れ、会議を作り上げる議長の視点に立ち、模擬国連そのものを捉え直した結果、冒頭でも少し触れた「教育者の論理」という新たな観点が浮かび上がりました。会議終盤になっても、スポンサー枠の争いよりも政策本位の議論に時間を割いていたカーボヴェルデ。スポンサー枠の争いに関わらない大使への心配りも忘れなかったカーボヴェルデ。混沌としていた議場に秩序を持たせようとする努力を怠らなかったカーボヴェルデ。「(国際大会における) 競技としての模擬国連」での優先度は低いが、「教育としての模擬国連」での重要性は決して小さくないポイントを、カーボヴェルデは無意識のうちに達成していたのです。そんなカーボヴェルデの会議行動を、議長はきちんと見てくれていたのだろうと、今では思っています。

国際大会を経験したことで、私の「模擬国連観」は確かに変化しました。新たなアイデアやスキルを手に入れたわけではありません。ただ「捉え方」が変わったのです。リーダーとしての理想的な会議行動は、かつての私にとっては、「勝利のための戦略」に過ぎませんでした(あるいは、過ぎないのだと思い込んでいました)。しかし、その会議行動は、それが戦略的には優先されない議場においても、やはり自分にとっての「理想」であり続けたのです。この経験により、私の考え方は大きく変わりました。つまるところ、件の会議行動は、「戦略」という位置づけを超えた固有の価値を持っており、それは、模擬国連を

通して得られる「学び」そのものを体現したものであったのだと、最後の最後に気づかされたのです。



柳津 聡

灘高等学校 3年

渡米のために空港へ向かう電車の中、僕は椅子に縮こまって不安に苛まれていました。自分はどこまで会議で通用するのか。「国際大会は今までの模擬国連ライフの集大成」と言えば聞こえはいいが、自分は結局模擬国連を2年間続けて何を得たのか。答えのない疑問が浮かんで消えて行きました。国際大会に日本代表として参加する機会はあまりにも圧倒的で、冷静に向き合うことができなかつたのでしょう。しかしNY派遣のおかげで今、模擬国連、そして自分自身を新たな視点から見つめ直せるようになったと僕は自信を持って言えます。ここでは会議を振り返り、自分なりに考えた模擬国連の意義について書きたいと思います。

まず会議について。僕達は軍縮を扱う国連総会第一委員会にて、化学兵器問題を議論しました。会議初日はチャンスに恵まれ、それを掴むことができた日です。初動には失敗しましたが、形成過程の大きなグループにちゃっかり溶け込み、ホワイトボードを使って議論をまとめました。その後もアメリカ人の弾丸のような早い英語に圧倒されかけるも、しっかりと自国の政策であるキャパシティ・ビルディングを売り込み、白熱した議論を適宜ホワイトボードにまとめることでリーダー格の一人に残ることができました。

会議2日目。僕はチャンスを自分で作り出せるはずでした。しかし、何もできませんでした。議長の意向で5つのグループが一度にコンバイン（他のグループとの意見統合）して60カ国以上がごった返しになり、大使があちらこちらで叫んでいる議場で、「こんな壮絶な光景に少なくとも高校中はまだ見合わせない」と我を忘れ感じたのを覚えています。大使が雑多に集まっている場に行っては、たまに二言三言喋るのが精

一杯でした。そして、提出直前に各グループの中樞が集まって、「じゃあここ、とことこ、ここね」と一瞬で決まったスポンサー（成果文書の提出国）枠の中にカーボヴェルデの名前はありませんでした。

その瞬間に僕の思考は止まってしまい、席に戻ってからは涙を堪えるのが精一杯でした。そして昼休みには、今までサポートしてくださった大学生の方々の前で涙を流しました。受賞にはスポンサーになるのが最重要、とのアドバイスを過去の派遣生の方々から伺っていた僕は、何のために議場に戻るのかという問いにぶつかりました。そこでふと思い出したのは、自分はカーボベルデ共和国の大使として約50万の国民の命を背負っている、という当たり前の事実だったのです。模擬国連における最も基本的な事実が、僕の重い足を押ししてくれました。ないがしろにしてきた大使の責務に向き合い、会議をやり抜くことができた。これが今のところ、一番自分にとって誇らしいことです。

僕は渡米前、国際大会の目標を、「今までの模擬国連で得た能力を発揮し、自分の人間的成長を実感する」と決めました。国際大会を終えて、その目的は曲がりなりにも達成できた、と感じています。今のところ、2年間の模擬国連活動で得た成長を僕は3つの分野にカテゴライズしています。1つ目は、コミュニケーション能力です。どんな渾身の政策を準備しても、周りの協力がないと何も進みませんし、対立する立場の国と歩み寄らなければ決議案は通りません。それも相手の性格、考えに応じて自分も方法（言葉、スピード、強弱、姿勢など）を変える必要があります。全日本大会では丁寧に合意を取りつつ、協調のために自己主張を抑えて臨みました。一方国際大会では、主張の激しいアメリカ人の中で埋もれないように強いトーンで発言し、いかにグループの中で自分の発言がインパクトを残せるかを意識しました。時と場合に応じて最適なコミュニケーション姿勢

で臨む大切さを模擬国連は教えてくれました。

2点目は、戦略性です。大使として参加している以上、達成しなければいけない国益があります。単に議論して、言いたいことを言っているだけでは、国益は最大化できません。次に議場で何が起こるか、を左右できるのが最も望ましいです。どの国とどの段階で交渉し、「今なぜ自分がこの行動」とっているのか、という目的意識・大局的視点を持って行動することを学びました。国際大会では、僕達は「相手の土俵に踊らされない」をモットーに臨みました。同じ英語力で議論できないのはしょうがない。発言するのが目的ではなく、グループを運営して決議案作成を主導するのが目的。では、英語力以外でどう優位に立って、グループの運営に携わるか。この精神が、1日目の成功に繋がっていました。

最後に、責任意識です。模擬国連は、負おうと思えばいくらでも責任を負わせてくれるフィールドだと感じています。もしも国際大会でグループリーダーにでもなれば、担当国の国民、ペア、他のグループメンバー、全日本大会で涙を飲んだ参加者達、その他お世話になった方々の思いを背負っていることを意味します。逃げ出したくなるような重圧ですが、そのパワーが会議中に自分をいつもとは違う自分にしてくれます。普段より自信を持っている様にスピーチしたり、時間管理に気をつけたり。プレッシャーが、自分が成長する起爆剤となってくれています。

僕にとって模擬国連は多くの学びを得られる機会でありつつも、それ自体が本当に楽しい活動でした。「一国の大使になりきって交渉する非日常的环境で、自分の一挙手一投足が国際社会を動かすことができる」という感覚を、僕は楽しんでいました。会議の準備の度には本番をどう切り抜けようと悩み、振り返りの度には「なぜこれができなかったのか」と悩みます。しかし、会議中の高揚感はその心労を上回るもので、それが模擬国連を二年間以上続けてきた原動力でした。そし

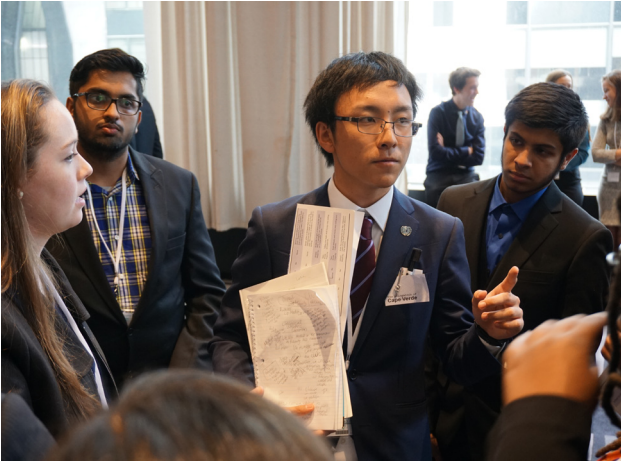
てその興奮は国際大会でも感じる事ができました。自分が涙できるほど没頭できるものを見つけたことにただただ感謝でいっぱいです。

「模擬国連なんて机上の空論で、世界を変えることはできない」と言う人がいます。僕もNY派遣まではその一人でした。国際問題を題材にしているだけで、実態はむしろ交渉力コンテストなのではないか、と考えていました。しかし、日本と全くスタイルの違うアメリカの Model United Nations に参加し、両方の高校模擬国連に共通する意義を追求した際に、一国の大使として国際問題を議論することの重要な意味に気付いたつもりです。

高校模擬国連の本質は、国際問題の専門家になることではありません。その本質は、参加者にとって国際問題が外国の問題・他人事ではなく、「自分ごと」になることだと思います。単に意見を持っているだけでは不十分です。責任ある一国の大使として、そのアイデアを決議案に具現化するために、行動しないといけません。それは会議戦略をしっかりと構築することかもしれないし、リーダーシップを取ることかもしれないでしょう。シリア内戦から、近場のゴミ問題まで、全ての社会課題の解決は主体者として真剣に考えることから始まります。僕にとって模擬国連は、模擬国連、国際問題を責任ある主体者として掘り下げさせてくれる場だったと今回気付かされました。

一国の大使として、一人の人間として。「もぎこっかー」ならば一度は聞いたことがあるフレーズかもしれません。NY派遣を終えて、このフレーズの持つ本当の重みを少しは理解できるようになった気がします。模擬国連にさよならをいう時は遅からず来るでしょうが、授かった教訓を忘れず、主体者として一歩ずつ世界に貢献できる人材になるつもりです。最後になりましたが、今回の派遣事業を支えてくださった全ての方に感謝を申し上げて、僕の報告書を締めたい

と思います。誠にありがとうございました。



■ 支援者・支援団体一覧

本大会の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます（敬称略）。

【後援】

外務省 文部科学省 公益財団法人日本国際連合協会 国際連合広報センター

【協賛】

株式会社内田洋行	一般財団法人 凸版印刷三幸会
株式会社エヌエフ回路設計ブロック	トヨタ自動車株式会社
学校法人 河合塾	株式会社ナガセ 東進ハイスクール・東進衛星予備校
キッコーマン株式会社	株式会社日能研
株式会社公文教育研究会	株式会社ニチレイ
TOEFL Junior® (GC&T)	海外トップ大進学塾 Route H
株式会社講談社	(ベネッセコーポレーション)
株式会社ジェイティービー	株式会社みずほ銀行
学校法人 駿河台学園	株式会社三井住友銀行
学校法人 高宮学園 代々木ゼミナール	三菱商事株式会社
	株式会社三菱東京 UFJ 銀行

(五十音順)

【協力】

私立中高進学通信	高校生新聞社
(株式会社エデュケーションアルネットワーク)	(株式会社スクールパートナーズ)
株式会社日本経済新聞社	日本航空株式会社
株式会社読売新聞グループ本社	株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
理想科学工業株式会社	

(五十音順)

■ ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) からのメッセージ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、グローバル・クラスルーム日本委員会とともに高校模擬国連事業を共催し、日本代表団派遣支援事業を推進しております。「次世代の国際人 / グローバルな人材を育成する」という趣旨にご賛同いただき、ご協賛・ご協力をいただいた企業様・団体様に改めて深く御礼申し上げます。

昨年、第 10 回全日本高校模擬国連大会で優秀な成績を収め、第 11 期の派遣団に選出された皆さんの国際大会における堂々とした英語での主張、交渉能力は立派なものでした。

カーボヴェルデ共和国という、初めて耳にする国の大使となった派遣生たちでしたが、ニューヨークの関連機関の建物に掲げられた旗を見るなり、「あ！カーボヴェルデだ！」と高揚しながら自分達の国旗をすぐさま見つけ出して駆け寄るほどに、大使としての意識を高めて臨む姿がとても印象的でした。議場においてカーボヴェルデという国の存在感を示した各派遣生たちは、十分偉大な任務を果たしたと強く感じました。

11 月の全日本大会は、昨年で 10 回目という節目を迎え、今年度からは少し形を変えた取組みも始まります。その中の一つ、新たに始まる予定のクラウドファンディングは、より多くみなさまに、この事業を知っていただき、支援していただけるような仕組みとなります。この報告書を読まれた方の中には、「自分も高校生だったら」と少し羨ましく感じる大人の方も少なくないのでは、と思います。私自身、そんな大人の一人です。今から高校生に戻ることはできませんが、高校生のため、共に事業に参画することを通して、私自身、

深い感動を味わいました。引き続き、この感動の輪を広げる働きに努める所存です。

最後になりますが、国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様へ、心より御礼申し上げます。今後もますます派遣事業が発展して行きますよう、ACCU としても精一杯努めてまいります。今後ともご支援・ご協力を宜しくお願いいたします。

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) について

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) はユネスコ (UNESCO、国際連合教育科学文化機関) から「アジア太平洋地域での文化の相互交流を促進する中核的センター」の設置を打診されたことを契機に、1971 年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、日本を拠点にアジア太平洋地区諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行なっています。2011 年 11 月からは「公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター」として、これまで以上に関係機関と連携して地域の現状と社会の要望に即した事業を展開しています。

■ グローバル・クラスルーム日本委員会（2017年6月現在）

（敬称略、順不同）

【アドバイザー・ボード】

明石 康
（元国連事務次長 / 公益財団法人国際文化会館理事長）

【評議会】

星野 俊也（議長）
（日本模擬国連 OB / 大阪大学大学院教授 /
元国連日本政府代表部公使参事官）

中満 泉
（日本模擬国連 OG /
国連事務次長軍縮担当上級代表）

紀谷 昌彦
（日本模擬国連 OB / 駐南スーダン大使）

柿岡 俊一
（埼玉県立浦和西高等学校教諭）

竹林 和彦
（早稲田実業学校教諭）

米山 宏
（公文学園中高等部教諭）

青木 文
（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
模擬国連推進部）

高橋 佑太
（東京大学経済学部3年 /
2017年度理事長）

南 篤
（東京大学農学部3年 /
2017年度研究主任）

安田 侑加
（聖心女子大学文学部3年 /
2017年度広報局長）

【理事会】

高橋 佑太（理事長）
（東京大学経済学部3年）

南 篤（研究主任）
（東京大学農学部3年）

岡野 源
（東京大学教養学部2年）

石本 達也
（東京大学教養学部2年）

神保 真宏
（東京大学経済学部4年）

安田 侑加（広報局局长）
（聖心女子大学文学部3年）

中村 詩音
（国際基督教大学教養学部3年）

明石 美優
（聖心女子大学文学部2年）

菊澤 萌
（関西学院大学国際学部2年）

児玉 大河
（慶応義塾大学法学部1年）

鈴木 雅子
（日本女子大学生物資源学部1年）

田邊 雄斗
（東京大学教養学部1年）

二木 恵
（早稲田大学創造理工学部1年）

■ おわりに

「模擬国連の意義と夢」

今年の派遣生は、昨年全日本大会における派遣決定以降、既にお互いにコンタクトを取っており、羽田からの出発当日は、全員がおそろいのオリジナルTシャツを持参するほどで、違う学校の者同士というよそよそしさは微塵も感じられませんでした。現地では各校の議場は別々の場所でしたが、日本代表団として、カーボヴェルデ共和国の大使を精一杯全うしようとする一体感と意気込みが感じられました。

会議までの数日間は、関連機関への表敬訪問を行いました。特に、この4月末に就任されたばかりの中満氏への訪問は、まだ勤務10数日目というお忙しい中、お目にかかれたということで、非常に貴重な経験となりました。日本政府代表部と中満氏訪問以外は当然すべて英語での講義でしたが、派遣生たちは熱心に耳を傾け、時間ぎりぎりまで質問が絶えないほど充実した訪問となりました。

肝心の会議においては、派遣生たちは各議場で奮闘するものの、言葉の壁もあり、全日本大会のようにはいかなかったようで、初日の終了後は疲れた様子の生徒も多く見られました。議場で思うように振舞えず、涙を見せた生徒もいたことが印象的で、どれほどの意気込みで臨んでいるかが分かるひとコマでした。また、日本代表団としてのやる気を象徴するものとして、彼らがわざわざ日本から小道具を持参したことも記しておきます。付箋や模造紙、小さなホワイトボードなど、アンモデにおいて、それらを駆使して自分達の所属するグループの意見をとりまとめていった派遣生たち。他国の生徒には見られない、微に入り細に入り工夫を凝らす日本のものづくりにも通じる丁寧さ用意周到さであったと感じました。

ほんの1週間余りの滞在でしたが、優秀校の名に違わない彼らのパフォーマンスを存分に見た思いがします。将来の日本を彼らのような優秀な生徒たちが担ってくれるなら、日本も安泰であろうし、団長として彼らを引率できたことを誇りに思います。全員違う学校の生徒ですが、教師として彼らを授業で教えてみたいと真摯に思えるほど、彼らに魅力を感じる旅でした。

幾度となく模擬国連に取り組む意義を説いてきた私ですが、ちょうどILOを訪問した際、先方の担当者が派遣生一人一人の将来の夢を尋ねるという場面があり、図らずも、私も彼らの夢を知ることとなりました。もちろん、将来国際貢献活動や平和貢献活動に従事することだけが模擬国連の意義ではありませんが、素晴らしい能力を持つ彼らを見るにつけ、この中から将来日本の外交を担う人材が輩出されることを願うのは、私だけではないはずです。

7日間の渡米は、彼らにとってかけがえのない財産になったはずで、このような機会が与えられたことはひとえにご協賛くださっている企業各社のご協力の賜物のほかなりません。最後に、この場をお借りして派遣団団長として御礼を申し上げるとともに、この素晴らしいプログラムを継続させるため、今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会 評議員
第11回日本代表団派遣事業 団長 米山 宏

■ 関連リンク

グローバル・クラスルーム日本委員会 / <http://www.jcgc.accu.or.jp>
Japan Committee for Global Classrooms

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター <http://www.accu.or.jp>

米国国連協会 / <http://www.unausa.org/>
United Nations Association of the United States
of America

グローバル・クラスルーム模擬国連大会事務局 <http://gci.gclaumun.org/>
(Lebanese American University)

【お問い合わせ】
グローバル・クラスルーム日本委員会 gc@jmun.org

MEMO



編集・発行 グローバル・クラスルーム日本委員会
 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行：平成 29 年 6 月